

主 題：偽りの宗教の盲目さ**聖書箇所：ヨハネの福音書 5章1－16節**

この朝見ていきたいのは、ヨハネ5：1－16のみことばです。まずはいつものようにみことばをお読みしますので、それぞれ神様のことばに目を留めてみてください。

ヨハネ5：1－16

「:1 その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。:2 さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた。:3 その中に大ぜいの病人、盲人、足のなえた者、やせ衰えた者たちが伏せていた。:5 そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。:6 イエスは彼が伏せているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。「よくなりたいか。」:7 病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」:8 イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」:9 すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。:10 そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った。「きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない。」:11 しかし、その人は彼らに答えた。「私を直してくださった方が、『床を取り上げて歩け』と言われたのです。」:12 彼らは尋ねた。「『取り上げて歩け』と言った人はだれだ。」:13 しかし、いやされた人は、それがだれであるか知らなかった。人が大ぜいそこにいる間に、イエスは立ち去られたからである。:14 その後、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。「見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから。」:15 その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を直してくれた方はイエスだと告げた。:16 このためユダヤ人たちは、イエスを迫害した。イエスが安息日にこのようなことをしておられたからである。」

さて、きょうの内容に入る前に大切な質問です。私たちが今学んでいるヨハネの福音書を、著者ヨハネが記した目的は何だったか、そしてそれはどこに書いていたか覚えていますか？それはヨハネ20：31で明らかにされていました。そこには「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」とありました。単に知識や情報を増し加えるためだったのではありません。書かれた目的は、私たちがイエス様こそ神の御子キリストであると知り、信じ受け入れ、その御名によって永遠のいのちを得るためでした。人々はイエス様の教えを聞いて、なされたみわざを目にすることを通して、この方がいったいだれなのかということを知り、それにふさわしい応答をすることが求められていたのです。そしてこれまで見てきた内容というのは、まさにそんな御子、イエス様と出会った人たちの実際の姿でした。救い主の偉大さを個人的に知った者たちは、結果としてその歩みが確かに変えられていったのです。たとえばバプテスマのヨハネの弟子だったアンデレやペテロは、神の子羊であるイエス様に出会って、この方に従う弟子になりました。また彼らはその後、カナでの結婚式でなされた最初のしるし、水をぶどう酒に変える造り主としての御子の偉大さを見て、さらにこの方を信頼する者になりました。彼らだけではありません。人々から嫌われていたサマリヤの女も、生ける水であるイエス様に出会って罪を赦され、町の人々に大胆にあかしするキリストの証し人となりましたし、死にかけの息子が癒された王室の役人も、またその家族もイエス様に出会って、この方を素直に信じる者となりました。こうしてイエス様こそ神の子キリストなのだと、本当に目の当たりにした者たちは、心が砕かれて、この方を信じ受け入れる者になっていったのです。それが今まで見てきた内容の大きなものでした。

○偽りの宗教の盲目さ：

でも、もちろんすべての者たちが同じように信じていたわけでもありません。その教えに繰り返し繰り返し触れて、力強いみわざに何度も何度も驚愕していながらも、かたくなに心を閉ざし続けた者たちも数多くいました。イエス様が与えてくれるものは喜んで受け入れたとしても、イエス様ご自身を喜んで受け入れようとしなない者はたくさんいました。また、ただ受け入れようとしなないだけでなく、そんな御子のことを激しく憎んで迫害し、何とかして殺そうとするような者たちもいたのです。それが今回から見ていくこの5章から頻繁に登場してくるユダヤ人指導者たちでした。きょうの聖書箇所最後の、ヨハネ5：16に、「このためユダヤ人たちは、イエスを迫害した。」と記されています。また、その少し後18節にも「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。」と書いていました。皮肉にも、この当時のユダヤ人指導者ほど聖書の教えに精通していた者たちはいませんでした。約束の救世主がいつか来ることを知っていたのもほかのだれでもない彼ら自身でした。でもそんな彼らとその救世主を最も拒んだのです。そんな彼らが最後には十字架につける、十字架につけると最も叫んでいたのです。たとえ正しい知識を持っていたとしても、たとえ信じられない奇蹟を何度目の当たりにしたとしても、その心は救い主から遠く離れていました。

私たちは思うかもしれません。なぜ救い主のすばらしさに気づかなかったのだろう、なぜ彼らは自分たちの目の前ですごいことが行われていてなお受け入れなかったのだろうと。でも知っていただきたいのは、そこには偽りの宗教の盲目さ、かたくなな不信仰というものがあつたということです。その盲目さ、かたくなな不信仰、それがどんなものだったのかということ、きょうはこの1-16節を四つの場面に分けて考えてみたいと思います。私たちはこれからイエス様がどんなお方なのかをまた見ます。そしてそれと同時に、このイエス様を拒んだ者たちが持っていた不信仰、盲目さを考えてみましょう。

1. 絶望的な状況にあつた病人 1-5節

一つ目の場面は「絶望的な状況にあつた病人」でした。1節からこう始まっています。「1 その後、ユダヤ人の祭りがあつて、イエスはエルサレムに上られた。2 さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があつて、五つの回廊がついていた。3 その中に大ぜいの病人、盲人、足のなえた者、やせ衰えた者たちが伏せていた。」とあります。さてこの場面を、レジメを参考にして頭に思い浮かべてみてください。エルサレムの町に行くと、その北側には「あわれみの家」という意味のベテスダと呼ばれる有名な池がありました。この池は隣り合わせの二つの池からなつていて、全体の長さは約100メートル、深さは6メートルほどの大きなものでした。また図を見てもわかりますけれども、その池の周りには五つの回廊がついていました。回廊というのは、屋根のついた柱だけの吹きさらしの廊下のことです。そしてその回廊の中には、大勢の病人が横になっていました。目の見えない盲人もいましたし、歩けない足のなえた者もいました。からだに麻痺を覚えて痩せ衰えた者たちもいました。さまざまな病気にかかつて痛みをうめき声を上げるような者たちがそこにはたくさんいて、苦しんでいたのです。

でも、どうしてこのような池の周りに彼らは集まっていたのでしょうか。そのことを理解するために、4節のみことばを見てください。実は、私たちが持っている聖書には4節が記されていません。ただ欄外を見ると、4節が記されているのです。小さな文字ですが、こう書いています。「異本に3節後半、4節として、次の一部または全部を含むものがある。「彼らは水の動くのを待っていた。4 主の使いが時々この池に降りてきて、水を動かすのであるが、水が動かされたあとで最初にはいった者は、どのような病気にかかっている者でもいやされたからである」と。このかぎ括弧の部分が3節後半から4節として欄外に置かれていました。絶対に勘違いしてほしくないのは、本文に4節が含まれていないのは、聖書が間違っているからではありません。昔の聖書注解者の間でも、今の聖書注解者の間でも言われていることは、最も古い聖書の写本の中には4節のことばはそもそもなかつたということです。つまりこの4節のかぎ括弧の中身というのは、著者ヨハネ自身が記したことばではありませんでした。このことばは簡潔に言えば、かつて写本を書き写した者たちが後で書き足した説明でした。写本を書き写す過程にお

いて、この箇所を読む読者たちがこの時の状況をよりわかりやすく、より理解しやすいようにと後でつけ加えた補足情報だったのです。そしてその4節の補足情報は、本文からは外されていますけれども、別にそれで本文の内容自体には大きな影響を与えることはないのです。ただこの4節を読んでみて、この補足情報は私たちの理解に助けになりますよね。当時の人たちの間で、ベテスダの池では水が動いた後に最初に入って行けば、どんな病気も癒されるということが広く信じられていたことを知ることができます。だからいろいろな病気に苦しんでいた人たちが一筋の希望を抱いて、この池に集まってきていたのです。治る可能性があるかもしれないと言われていたからです。

そして、そうやって大ぜい集まっていた者たちの中に、今回の中心人物のひとりである病人も横になっていました。5節に「そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。」と書いていました。想像してみてください。この人がいつ池にやって来たのかはわかりません。でも確実に、もしかしたら自分も癒されるかもしれないという期待を持って彼もやって来たでしょう。でも残念ながら、足が不自由だった彼は、そこでほかの人たちが先に池に降りていく様子をただ見ていることしかできませんでした。数日がたち、数週間がたち、数か月がたち、数年が経ち、何もできないまま月日は過ぎていきました。間違いなく彼のうちには悲しみや痛みが次第に広がっていたでしょう。何もできない、何も変わらない現状に対して大きな絶望感を抱いていたでしょう。

2. 憐れみを示されたイエス様 6-9 a 節

皆さんに考えていただきたいのは、そんな絶望的状况に置かれていた病人をイエス様が見つけれられるということです。そしてその病人を見つけたあわれみ深いイエス様は、その者のところに行って、自ら手を差し伸べられるのです。その様子が次の二つ目の場面「あわれみを示されたイエス様」になります。6節にこのように続いていきます。「イエスは彼が伏せっているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。「よくなりたいか。」」と。言うまでもなくイエス様は優しさにあふれたお方でした。イエス様が訪れていたこの池は、豪華な着物をまとっているような人が集って、おいしい食べ物が食べられて、ゆったりくつろぐことができるような場所ではいっさいありませんでした。そこには周りの人たちから敬遠されているような病気にかかった人たちがあふれていました。痛みも、涙も満ちていて、あちらこちらからはうめき声や叫び声が聞こえてくるような、そんな辛い場所だったのです。多くの人たちは、そういったところに行きたくなかったでしょう。でもそんな場所に、イエス様はだれに言われたわけでもなく、自ら進んで行かれたのです。この方は確かに分け隔てをなさらない、ご自身のことばどおりの罪人の救い主でした。マルコ2：17でも「**医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。**」と、イエス様は言われていました。そしてそのような最高の医者であるイエス様が、回廊の中で伏せっていたひとりの病気の人のもとに来て、「よくなりたいか」と質問したのです。

これを聞いて、ある人は「イエス様、それはよくなりたいに決まっているでしょう」と思うかもしれませんが。たとえば私たちが仮に病院に行ったとして、そこに長い間苦しんでいる患者がいたとすれば、そのような人に対して私たちも病気が癒されたいですかとは多分聞きません。よくなりたいと願っているのは、ごく当たり前のことのように思うからです。周りを見渡したら病の人たちだらけの中で、イエス様はなぜこの人に「よくなりたいか」という質問をしたのでしょうか。イエス様は愚かな質問をするようなお方ではありません。少なくともいくつかの理由は考えることができます。

どんな理由かと言うと、一つは、長い間病を患っていた、周りの世話を受けてきた者にとっては、その生活を失うことの方が逆に耐えられない場合もありました。長い間病を患っていて、周りの世話や施しを受け続けてきた者にとっては、時にその生活を失うことの方が耐えられないような場合もありました。こんなことばをJ・A・フィンドレーという人物も述べています。「中東や現在の一部の地域では、癒された男性はぜいたくな生活を失うことになるのです。」と。私たちは癒されれば、より良い生活が待って

いると思いますけれども、あるところでは癒された方が大変な生活になることがありました。これは別に私たちに関係ない話でもありません。今の社会を見渡してみても、同じようなことがあります。たとえば以前ニュースで取り上げられていた問題の一つに、生活保護から抜け出したい人の実態がありました。アメリカや日本で生活保護を受けているような人が何十万もお金を働かないで手にして、また医療費も全部保障されるからこそ、その状態にある人はその快適な生活を手放したくないとして働こうとしないのです。世の中に出て一生懸命に働くよりも、何もしないで今のその状態の方が周りも気にかけてくれるし、楽でいい。そのようなことはいろいろな社会で起こっていました。ベテスダの池で横になっていた病人にもわかっていたはずですが、この人たちはもちろん多くの悲しみや難しさも経験していましたが、同時にある意味彼は日陰になっている回廊で、周りの施しを受けながらずっと横になっていることができました。働かなくても、そこにずっといられたのです。そこから外を見渡してみれば、太陽の下で荷物を運んだり、汗水垂らして働いているような人たちの様子が見えたでしょう。癒されたら、自分もそこに行かないといけないとわかっていました。自分にもそのような大変な働きや責任が待っていることを彼はわかっていました。だからこそイエス様の問いというのは重要なものだったのです。あなたは本当に癒されたいのですか、たとえあなたの今のその生活を全部捨てることになったとしても、本当に良くなりたいたいのですかと。

でもこの理由以上に、イエス様が「よくなりたいたいか」と質問したわけには、この病気の人物のなえ切った心に希望をもたらすためでもありました。あわれみ深い主は、この人物の状態をよくわかっていた上で、その人の心を励まそうともするのです。考えてみてください。この人物は38日ではありません、38年もの間ずっと病を患っていました。足の不自由な中で、何とか池にやって来てからも、我先にと水に入っていくような者たちのことをただ眺めているしかできませんでした。最初は、自分も治るかもしれない、そうやって期待を持ってやって来ていたでしょう。でも何年もそのような状態が続けば、そんな期待もほぼ消え失せていたと言っても過言ではないでしょう。自分もう癒されることはないのではないかと諦めて、心が失意に満たされていたとしてもおかしくはなかったでしょう。実際に、みことばを見てください。イエス様のその「よくなりたいたいか」という問いに対して、彼はこんなふうに答えていました。7節に「病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」」と書いています。彼が持っていた現状の不満や悲痛さが読み取れます。「よくなりたいたいか」と聞かれた時に、彼はすぐには「はい」と答えず、自分の置かれた絶望的な状況を訴えていたのです。無力でどうしようもない自分自身の立場というものを嘆いていたのです。面白いのは、彼は自分の目の前にいるその存在が世界の造り主であって、いのちの源であって、必要な助けを唯一与えることのできる、そんな力強いお方であることに全く気づいていませんでした。無知だったのです。でもそんな無知な者、苦しんでいる者を前にして、イエス様は本当に癒されたいのですかと声をかけて、力強いみわざをもってあわれみを示されていくのです。

続く8-9節のところこう記されていました。「:8 イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」:9 すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。」と。絶対に勘違いしてはいけません。あわれみ深いイエス様は、決して弱々しい力のない方ではありませんでした。この方は圧倒的な権威を持ったお方でした。どれだけ人を長い間苦しませ、人の手には到底負えないような病であったとしても、イエス様の手にかかれば何の問題もありませんでした。しかもここにいる人たちは病が治されるために我先にと池に走って行っていたのです。でも、そんなところに行く必要はありませんでした。イエス様はその場において、「起きて、床を取り上げて歩きなさい」と、ほんの少ないことばだけで十分でした。これが、イエス様が持っていた力でした。ただそうやって命じるだけで、38年もの間全く歩けなかった人物が徐々にではなく、すぐに治って歩くことができるようになったのです。こうしてイエス様は驚くべき信じられないようなみわざを行いました。これを通して、これまでと同じように、ご自分が確か

にあわれみに富んだ神の御子キリストであることを公に証明されたのです。驚くべき恵みが示されていました。

3. 盲目であったユダヤ人指導者 9b-13節

でも、ここから話は急展開していくことになります。これまでの内容は、ある意味で長い長い導入、イントロのようなものでした。そしてここからが本番になります。今回の中心とも言えるような場面がこれから見ていく9節の後半から続いていくのです。それが三つ目の場面となります。三つ目は「盲目であったユダヤ人指導者」でした。前半部分はすばらしいみわざをなされていました。でもそこから変わっていきます。9節の後半から「ところが、その日は安息日であった。:10 そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った。「きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない。」」と記されています。38年間病で歩けなかった人が目の前を歩いているのを見て、ユダヤ人指導者が最初に口にしたのは、「うわっ、すごい！良かったね」という喜びでもなければ、「どうやって癒されたの？」という驚きでもありませんでした。真っ先に彼らが発したことは、「きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない」でした。知ってほしいのは、旧約聖書のどこを見ても、安息日に床を取り上げてはならないなどという決まりを見つけることはできません。そんなものはないのです。確かに安息日自体は、初めから特別な日でした。主の民は、主が6日間創造の働きをなした後7日目に休まれたことを覚えて、自分たちも休むことが求められていました。人々はその日を聖なる日として守って、日常の仕事や生活を横に置いて、その日に主に礼拝を捧げて主を楽しんで、そして何よりも主のうちに休息を見出そうとしていたのです。安息日というのは、もともと神様が人に与えた恵みの日、喜びの日でした。すばらしい日だったのです。それがもともとの神様の創造の時からのご計画でした。でも悲劇的なことは、ユダヤ人指導者は、本来そうやって祝福の日であったはずの安息日を次第に重荷へと変えていったということです。

彼らは安息日を破らないようにするために、神様のことばとは別に独自のルールを定めるようになりました。安息日は、本当は神様を楽しめる日のはずなのに、彼らは特に安息日にはならない仕事や働きを明白にしようとして、39もの禁止事項を設けました。そのリストにはこんなふうに記されています。「主な労働の種類は…、種を蒔くこと、耕すこと、刈り取ること、束ねること、脱穀すること、風選すること、穀物をきれいにすること、挽くこと、ふるいにかけること、こねること、焼くこと、羊毛を刈ること、羊毛を洗うこと、紡ぐこと、織ること、二つの輪を作ること、二つの糸を織ること、二つの糸を分けること、結ぶこと、解くこと、二針縫うこと、二針縫うために裂くこと、野獣を狩ること、それを屠ること、皮を剥ぐこと、塩漬けにすること、皮をなめすこと、皮を削ること、切り分けること、二文字書くこと、二文字書くために消すこと、建てること、取り壊すこと、火を消すこと、火をつけること、金槌で打つこと、一つの場所から別の場所へ物を運ぶこと」、このリストをしてはならない働きとしました。尋常でない細かさです。彼らは安息日というものを守るために、みことばに加えて人の勝手なルールを付け加えたのです。結果として、神様が本来意図していた意味や安息日の本来の目的を大きく歪めることになったのです。

そして、きょう私たちが見ているこの病人が違反した項目は、最後の「一つの場所から別の場所へ物を運ぶこと」になるのですけれども、この点に関しても、ユダヤ人たちにはほかにも不思議な、おもしろいとも言えるようなルールがありました。たとえば安息日に入れ歯を装着することすら禁止されていました。なぜかと言うと、もしそれが落ちてしまったら、そこから拾い上げるという行為が仕事になると見なされてしまったからです。また、彼らはハンカチを持ち運ぶことすらも禁じられていました。もし仮に、自宅の2階から1階に持って行きたいような場合には、そのハンカチを服に縫い付けるか、首に巻いて、1階に降りてからそれをほどくという作業が必要でした。また、ユダヤ人たちは義足をつけた人に対しても、もしその人の家が火事になったら、その義足を安息日に持ち出していいのかということさえ議論

していました。私たちはおもしろいと思うかもしれませんが。でも彼らはそれだけこの安息日を破らないというところに真剣だったのです。それだけ厳格に守ろうとしました。

そんなユダヤ人の指導者が、ある安息日、目の前を通り過ぎていくその者の姿に目を留めるのです。長い間、病を患っていた者が多分大喜びで歩いていたでしょう。そしてその長い間患っていた病が癒されたことは何にもまさるすばらしい驚くべき出来事でした。でもそれ以上に、彼らにとってはその目の前を床を持って通り過ぎる者の存在を決して許すことができなかつたのです。彼らは腹を立てました。そして、その怒りの矛先は癒された者だけではなく、癒した者にまで及ぶようになるのです。続く11-13節にもこんなふうに書いています。「:11 しかし、その人は彼らに答えた。「私を直して下さった方が、『床を取り上げて歩け』と言われたのです。」:12 彼らは尋ねた。「『取り上げて歩け』と言った人はだれだ。」:13 しかし、いやされた人は、それがだれであるか知らなかつた。人が大ぜいそこにいる間に、イエスは立ち去られたからである。」と。厳格な指導者たちは、正しい知識はたくさん持っていました。彼らは一つ一つのルールを熱心に守ろうとさえしていました。でも彼らほど目の前にはっきりと示された真理を見ることができなかつた者はいなかつたのです。

なぜ気づかなかつたのか——。その一つの理由は、彼らが持っていた偽りの宗教、律法主義でした。彼らは律法主義というものに固執していました。そしてそれがその人たちの心の目を盲目にしていたのです。皆さんも律法主義ということばを聞いたことはあると思います。でも律法主義とは何なのでしょう。もっと言うと、この時ユダヤ人の指導者たちが持っていた問題とは何なのでしょう。彼らのその律法主義的な態度は、どこに問題点があつたのでしょうか。問題点は、彼らが従順であろうとしたことではありません。彼らが神様の戒めを守って、罪から離れようとしたことでもなければ、神様の前を正しく生きようと求めていたことでもありません。問題は、彼ら自身が律法を与えた神様を忘れていたことにありました。彼らは律法に目を向けていました。でも、彼らはその律法を与えたお方、神様の存在を忘れていたのです。彼らは戒めを与えたお方が持っていた目的を忘れていました。それを無視して、彼ら自身の目的のために勝手に「戒め」を用いていたのです。

そもそも安息日というのは、主が人々に与えた恵みでした。人々が造り主であられる主の働きというものを覚えて、その主を楽しんで、その主を礼拝し、その主のうちにあつて休息することのできるすばらしい日でした。でもそれがいつの間にか、安息日を守ることが主の前に受け入れられる条件のようにすりかわつていたのです。安息日を与えたお方ではなく、安息日のみに彼らの心は囚われていました。ユダヤ人指導者たちは、そうやってさまざまな律法というものを、ただ完全に守ることによって、自分は正しい者とされ、そしてそれを守っていない者たちは自分よりも劣っているという優越感を抱いていくようになりました。彼らは自分たちの行い、自分たちの努力によって神様に受け入れられ、神様の愛や祝福を獲得することができると思ひ込んでいたのです。彼らの中心は自分たちにあります。そしてこれが律法主義の持っている大きな問題になるのです。

これについてはいつか詳しく見たいと思いますが、律法主義というのは、私たちの歩みの中にもいろいろなところに潜んでいます。いろいろな形で現れます。私たちが神様を忘れて、自分のことだけに囚われてしまう、そのような形はいろいろなところにあります。たとえば、ある人は神様のことを愛して、誘惑から身を避けるためにお酒を飲まなかつたり、テレビやネットからも離れようとするかもしれません。これ自体は別に律法主義ではありません。むしろ良いことだったりするでしょう。でももしその人が、お酒を飲まずに娯楽から離れているから自分はそれらをしている人と比べて正しいのだ、より神様に受け入れられるのだと考え始めたら、それは大きな問題になるのです。ある人はキリストに似た者になりたいと自分で決めて、毎朝デボーションの時間を持ち、教会で奉仕しようとしているかもしれません。これ自体は別に律法主義ではありません。これもとても良いことでしょう。でももし毎朝聖書を読んで、祈っているから、自分は忠実に仕えているから、ほかの人と比べて神様に喜ばれて、神様の前に価値あるもの

と見なされると考え始めているのであれば、それも大きな問題になるのです。C・J・マホーニーという先生も律法主義をこんなふうに定義していました。「律法主義とは、神の赦しや受け入れを、神への従順という行いによって得ようとすることです。言い換えれば、律法主義者は、自分の行いや努力によって、神の承認や赦しを得られるかのように振る舞う人のことなのです」と。忘れてはいけません、私たちはだれひとりとして、自分の何かによって、神様の前に正しいと受け入れられることはありません。自分たちの努力も、行いも、私たちが神様からのさらなる祝福を、さらなる承認を得られるものではありません。ただ私たちは恵みのゆえに、私たちの代わりに十字架にかかって死んでくださった主イエス・キリストのゆえに義と認められ、神様の前に受け入れられるのです。

そして、その愛する神様が自分自身に与えてくださるすべてのものが恵みであると覚えているのであれば、たとえ戒めや命令でさえも、私たちにとって重荷とはなりません。こんなことを考えたことないですか？ 私たち自身も時にみことばの命令から、神様を切り離して考えることがあります。目の前にあるその命令というものを、ただ自分が一生懸命に頑張らないといけない、ただそれに頑張っ、頑張っ、努力をもって従っていかないといけないと考えて、それが次第に重荷に感じるようになるのです。でも本来みことばは、私たちのうちに最高の喜びをもたらしてくれるはずの神様の贈り物でした。私たちを愛してくださる神様が、私たちの益のために、私たちの成長のために、私たちの喜びのために与えてくださったもの、それが私たちにとってのみことばでした。だれが私たちにそれを与えてくださったのかということをおぼえてはいけません。シンクレア・ファーガソンというひとりの神学者も、この点について次のようなことばを残しています。「私たちが今、信じてしまっている嘘とは、神の栄光を称えることが、永遠に神を楽しむことではなく、むしろすべての喜びを失うことになるということです。…律法主義は、神についての本当の真理、すなわち、私たちが神の栄光を称えるとき、私たちは神と神のくださる全てのものを永遠に楽しむようになるという真理を見るときこそ、打ち砕かれます。これは未信者には理解しがたいことです。しかし、信仰者の人生において幸せな第一の原則なのです。」と。ある人たちはみことばに従っていくこと、神様に従っていくことは、私たちの喜びを失わせるものだと考えます。でも信仰者にとってはそうではありません。私たちのことを愛して下さり、私たちのことを恵みによって救ってくださったお方、私たちの父であるお方に愛の応答として喜んで従っていくから、私たちにとってのみことばは重荷にはならないのです。私たちに必要なのはどんな時も神様に目を留め続けることでした。

4. 迫害されたイエス様 14-16節

みことばや律法から神様を除けば、そこに残るのはただの重荷でした。それは喜びではなく、偽りの宗教になるのです。ユダヤ人指導者は、まさに重荷というものを人に背負わせる、そんな悪でした。そしてそんな悪をイエス様が明るく照らし続けたからこそ、彼らはイエス様のことを迫害するようになったのです。それが最後の場面になります。四つ目は「迫害されたイエス様」でした。みことばに戻って、14節にこのように続いています。「その後、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。「見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから。」」と。ここでイエス様は偶然彼に出会ったのではありません。癒された人を探しておられたイエス様は、宮の中で彼のことを見つけて、こう口にしていました。「もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから」と。ここで覚えていてほしいのは、みことばは時に私たちの犯した罪が原因で病気が引き起こされることがあると教えていることです。もちろん勘違いしてほしくありません。すべての病気が例外なくそうなのではありません。実際同じ福音書の中を見ても、少し進んだヨハネ9：2-3で、イエス様は病気に関してこんなことを言われていました。盲目に生まれた人を目の前にした弟子たちの質問にイエス様はこう答えるのです。「2 弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」3 イエスは答えられた。「こ

の人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」と。ですからすべての病気が、罪が原因で起こるのではないのです。でもそれと同時に、みことばは罪を犯し続けるような者が病気にかかったり、亡くなったりすることもあることを教えていました。たとえばコリントの信仰者にもそのようなことは起こっていたのです。Iコリント11:30にはこう書いていました。「**そのために、あなたがたの中に、弱者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。**」と。主の晩餐を軽んじた信仰者たちの中には病気になる者も、また亡くなった者たちもいました。罪というものを軽んじてはならないということです。

そしてそれと同じように、今回のケースもそうでした。具体的に何の罪を犯したのかは私たちにわかりません。でも38年もの間、病にかかってきた者も、自分が犯していたその罪のゆえにひどい苦しみを味わいました。そしてそれゆえに、そのからだが癒された後、あわれみ深い主はその者のところに来て告げたのです。もう罪を犯してはなりません、「**もっと悪い事**」が起こるといけないからと。この「**もっと悪い事**」に関しては、ある人はさらにこの足がなえる以上に深刻な病気になるというふうにとっていたりもしますし、ある人たちはこれをこの人が永遠の滅びに行ってしまうという意味でとっていたりもします。ただいづれにしろイエス様はここでまたあわれみを示していました。苦しんでいた病に煩わされていたその者のからだの必要を満たすだけでなく、彼の心が抱えている必要にさえ手を差し伸べられていたのです。最初から最後まで、イエス様はあわれみ深いお方でした。

では、そんなイエス様のあわれみに、この人物はどんなふうに応答したのでしょうか。最後15-16節にこう書いていました。「**その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を直してくれた方はイエスだと告げた。:16 このためユダヤ人たちは、イエスを迫害した。イエスが安息日にこのようなことをしておられたからである。**」と。彼の取った応答はとても悲しいものでした。その身にイエス様の優しさやあわれみというものを受けながらも、彼はイエス様の元を離れて行ったのです。長年の苦しみから助け出されたことを感謝するのではなく、助け出してくださった方を憎む者たちのところに向かって行きました。そして彼の口から自分を治してくれた方はイエス様なのだと聞いたユダヤ人指導者は、腹を立ててこの方を迫害し始めるのです。迫害するのは、この5章だけの話ではありません。ここから先、十字架にかかるまでずっと続いていきました。彼らは激しい憎しみを燃やして、イエス様を殺害する計画を立て続けていくのです。盲目であった彼らは、恵みである方を求めるのではなく、その恵みから遠く、遠く離れて行きました。自分の熱心な行い、律法や伝統を自分が熱心に守ることに己の救いを求めていた者たちは、たとえ目の前に恵みがあったとしても、その恵みを見ようと、その恵みの前にへりくだって助けを求めようともしなかったのです。

これがきょう、ヨハネが教えてくれるみことばでした。そしてこの箇所は私たちにとっても、大切な事実を教えてくれています。たくさんの知識や理解が人を救うのではないということです。懸命な努力や熱心さによって人は救いへと到達するのでもないということです。もしそうだったらパリサイ人たちが、律法学者たちが、ユダヤ人たちがそうだったでしょう。罪深い私たちが救いに至ることができる唯一の道は、ただあわれみ深い救い主の助けを求めることでした。だからこそまだイエス様を個人的に知らない方がおられれば、きょうという日にこのあわれみ深い救い主を知ってください。みことばは、はっきりと私たちの目の前にイエス様の姿を明らかにしてくれています。その場で奇蹟を見なくても、ここに奇蹟を見ることができます。だからこそはっきりと示された方の姿を見て見ぬふりするのではなくて、自分の救い主として信じ受け入れてください。この方にあるあわれみをぜひ知ってください。またこのイエス様のあわれみをすでに知っておられるという兄弟姉妹の皆さん、ヨハネの学びを通して、かつて地上に本当に来てくださった主がなされた力強いみわざ、味わわれた喜びやまた痛み、また何よりもこの方が持つておられた愛の深さの理解はさらに深まっているのでしょうか？ほかのだれでもない、私た

ちのために示してくださったその愛とあわれみに対する感謝は、増し加わっているでしょうか？今週もこのイエス様に心を留めて感謝と愛の応答として、みことばを忠実に歩む者として歩んでいきましょう。